

子供と一緒に過ごしているとき、こんな場面はないでしょうか。大人から子供へ「服をたたむときは、しっかり見ようね。」「挨拶をするときは、相手の顔を見るんだよ。」あるいは、子供から大人へ「(お菓子の袋を見せながら)開けてください。」「(テレビ番組を指差ししながら)あれ、何?」など、日常生活の中では、子供と大人が同じものや出来事に注意を向け、それを共有する場面がたくさんあります。そこには、言葉を介する場合もあれば、指差しや視線で伝える、ものを見せる、手渡すなど、言葉を介さない場合もあります。私たち大人にとって、こうしたやり取りは、子供と「気持ちを通じ合った」ように感じられ、嬉しくなる瞬間でもあります。

このように、共通する「もの」や「出来事」に対して、自分と相手が同時に注意を向けることを「共同注意」といいます。

【1. 共同注意とは】

「共同注意 (Joint Attention)」について、スケイフとブルーナー (1975) は、乳児が他者の視線の方向を追い、同じ対象に注意を向けることについて研究しました。その後、「共同注意」は、視線だけでなく、指差しやものを見せる、手渡すなどの行動も含めて幅広い研究が進み、「自分」と「相手」と「もの・出来事」の3者がつながること (3項関係の成立) として捉えるようになってきました。

例えば、子供が新幹線を見て「おーい」と呼びかける。大人もその新幹線に気づき、「新幹線が来たね」と子供と一緒に見る。このとき、「大人—自分—新幹線」という3者のつながりが成立します。右の写真は、小学部1・2年生の道徳科の授業の一場面で、みんなの前でロールプレイの発表を行っている友達の様子を、支援者である教師と子供たちが共有している様子です。発表している友達を見ている子供たちと教師の間には、「教師—自分—発表している友達」という3者のつながりがあります。このように、授業の中でも注意を共有する場面はたくさんあります。



【2. 共同注意が成立することの意義】

子供と大人とのコミュニケーションの形は多様です。例えば、子供と大人がお互いに顔を見合わせて笑い合ったり、声を掛け合ったりするような「自分—大人」という二者の関係は、「2項関係」といいます (イラスト1)。この2者の間では、大人が笑うことで子供が笑い返す、または子供が笑うことで大人が笑い返す、といったことを通して感情を共有することができます。

一方、「大人—自分—もの・出来事」といった3項関係において、「共同注意」は、言語の獲得や人とのコミュニケーションの発達に関わっているといわれています (マイケル=トマセロ, 1995)。特に、子供と大人が同じものや出来事に注意を向けることで、その対象についての言葉や意味を共有しやすくなり、言語の獲得にもつながっていくと考えられています。

さらに「共同注意」に関連する行動として、指差しを理解したり、自分から指差しをしたりする「指差し行動」、大人の視線を追って対象を見る「視線追従」、対象に対する評価 (「好き・嫌い」「良い・悪い」など) をするとき大人の表情を参考にする「社会的参照」があります。また、自分が興味のあるものを見せたり、手渡したりすることも、「共同注意」に関わる行動として考えられています。

これらの行動を通して、子供は大人の意図や感情に気付いたり、対象についての理解を深めたりしながら、「これは楽しいものだ」「これは触ると危険なものだ」といった、ものや出来事に対する捉え方を大人と共有することにつながっていきます (イラスト2)。



イラスト1 「2項関係」



イラスト2 「3項関係」

【3. 一人一人の注意の向け方にも寄り添いながら】

幼児と保護者が自由に遊ぶ場面を調べた研究 (ユルコビック=ハーディングら, 2022) では、子供と大人が同じ対象に注意を向けて「共同注意」を成立させる際、互いの顔を見合うことは必ずしも必要ではないことが示されています。研究では、子供が保護者の顔を見ることは少なくとも、相手の手の動きなどを手掛かりにしながら、同じものに注意を向ける「共同注意」が生じていたことが報告されました。

子供の様子を見ながら、必要な情報を伝えようとするとき、「見ているか」「見ていないか」を目安に、「分かっているか」「分かっていないか」などを判断することがあります。しかし、大切なのは、「見る」だけでなく、その子が何に気づき、何を手掛かりにし、どのように人やもの・出来事と関わっているのかを、その子なりの多様な「関わり方」にも目を向けながら捉えていくことなのかもしれません。

今回のテーマ「共同注意」を意識することで、子供たち一人一人の他者との関わり方に応じて、「子供の興味・関心の対象にどのようにアプローチしていくか」「その対象に関する情報をどのように共有し、言葉や感情などでどう伝えていくか」について考える際のヒントになれば幸いです。